1959年1月31日第3種郵便物認可（月615円郵便160円、会員は会費に含む）

週刊

うたごえ新聞

12／1
（2003年）
NO. 1910

THE SINGING VOICE OF JAPAN（UTAGOE）
日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-16-36
☎03(3209)0638 FAX03(3200)0105
E-Mail:journal@utagoe.gr.jp
http://www.utagoe.gr.jp/journal/
振替口座 00120-6-5631 毎週月曜日発行

晩秋の信濃路に 人の唱あふれ

2003年日本のうたごえ祭典 inながの（11月14～16日）

のべ14500人のヒューマン・ヴォイス

「緑のくに、それは いのちのふるさと。」〝2003年日本のうたごえ祭典inながの〟が11月14～16日間、2つの音楽会、大交流フェスタ、合唱発表会等のべ1万4千5百人が集い開かれた。開幕と同時に信州の魅力に包まれた音楽会Ⅰ〈ふるさとの心〉、超満員の大交流フェスタ〈いのちの輝き〉、好評を博した歌劇「沖縄」の音楽会Ⅱ〈平和のうたごえ〉、〝ながの祭典〟今号より特集で紹介。

祭典一週間前に札止めとなった音楽会Ⅱ、一カ月前に県民文化中ホールから大ホールに会場を移した音楽会Ⅰ。最後の一週間で5千席のビッグハットを埋めさらに当日は5千750人が参加して歌い交した大交流フェスタ。どの音楽会も、祭典を機に県内各地で歌う喜びを広げようととりくんだ開催地長野と全国の協同が実を結び、満席での音楽の交歓は、また新しいうたごえのページを創った。

〝松代から沖縄へ〟、今祭典のコンセプトは、「いのち・ふるさと」と来年の〝日本のうたごえ祭典inおきなわ〟にもつなげる「平和」だった。

多くの唱歌作者が輩出した長野ならではの音楽会Ⅰ、「ふるさとの四季」メドレー、信州の自然を映す映像などで全国を迎え、組曲「光の種子をまくとき」から、31年ぶりにオーケストラで演奏された音楽会Ⅱの歌劇「沖縄」まで。その縦糸に、「新世界」編曲・指揮の池辺晋一郎氏、企画段階から協力の地元田楽座のみなさん、長野出身、ゆかりの専門家の演奏が音楽会を深く豊かにして伝えられた。

音楽会Ⅰには鷲澤正一長野市長もあいさつに駆けつけた。

（祭典関連3・4・5・6・8面）

▲写真上段大交流フェスタ〈いのちの輝き〉ロックソーラン（11月15日）、（上）は16日、音楽会Ⅱ〈平和のうたごえ〉歌劇「沖縄」より

ふめんだい

今年、「有事立法」から始まり、つい最近の自衛隊の「イラク派遣」まで、ものすごい早さで戦争準備が進められた。最後の仕上げが教育基本法、憲法の「改正」。

☆ ★ ☆

自衛隊が訓練のために使用する弾薬は1日当り5億円だという。この金額が毎日毎日空に消えていく。銃弾で人が殺される前にこの「備え」のために人が死んでるといっても過言ではない。

☆ ★ ☆

戦前へ引き戻す速度を増しながらこの日本をどこへ引っ張って行こうというのか。

☆ ★ ☆

そんな中、日本のヘソに当る信濃から発した「ヒューマン・ヴォイス」。

高らかに人間の存在を歌い上げた。声も力もまだ小さいかもしれない。しかしゆたかな命、平和な国、この国の未来を決めるのは私達！ たしかな手ごたえを感じさせるものであった。

ながの祭典小林信敬運営委員長が打ち上げでつぶやいた一言。「人間、捨てたもんじゃないなー」。苦労のすえ攻めて手にした「人と人とのつながり」大切にしたいものだ。

☆ ★ ☆

この声、力をさらに大きくして沖縄へ （尤）